

「あなたの富のあるところ」

マタイによる福音書 6:19-24

2025年7月20日
野村 友美 師

<私たちの生活を左右するもの>

今日は参議院選挙の投票日ですね。政治に対して期待することはそれぞれですが、こうやって選挙という形で意思表示をすることができるのは、とても幸いなことだと思います。

社会の中で生きている限り、私たちの生活はどうしたって政治に左右されます。「自分には関係ない」と思っていることでも、まわり廻って必ずどこかで影響を受けることになる。それが政治とか政策というものです。ですから、誰に政治を委ねたいかを考えてぶことができるのは、本当に幸いですし、私たちの大事な権利だと言っていいでしょう。

自分たちの生活を握る「主人」の座に、誰を据えるか。それはいつの時代も、どこの国で生きる人にとっても、重要な問題です。

イエス様の時代のイスラエルでは、国の政治は貴族や神殿の大祭司、ユダヤ教の指導者たちと、ごく一部の人たちが担っていました。もちろん一般の人々には、選挙権なんかはありません。限られた人たちが、自分たちの中から人を選んで、最高議会のサンヘドリンを組織して、政治を行っていたんです。

さらに当時のイスラエルはローマ帝国の支配下に置かれていましたから、サンヘドリンの政治も、基本的にはローマ皇帝のやり方に従っていま

した。税金も、イスラエルの住民税と神殿税、そして祭司やレビ人などの聖職者を支える税に加えて、ローマ帝国に納める税金がありました。現代の日本も税金が高くて大変ですけど、この時代のイスラエルも、何かと税金が課せられて、人々の生活はかなり苦しかったようです。自分の国の権力者たちと異国の皇帝の、二重の支配のもとで、人々は日々の生活に追われていました。

そんな中で、貯めておけるものは少しでも貯めておきたいと思うのは、生きるための知恵として当然のことでしょう。なのに今日の箇所では、イエス様は不思議なことを言っておられます。

地上に富を積んではならない、あなたの富は天に積みなさい。

<地に積む富、天に積む富>

「富を天に積む」って、いったいどういうことなんでしょうか？

そもそも、私たちの「富」とはいったい何なんでしょう。「富」は、そのまま言えば、お金とか不動産とか高価なもの、いわゆる財産と呼べるようなもののことでしょう。

私たちの生活や未来を、保証してくれるもの。あるいは、保証してくれると思えるようなもの。私たちの社会において、力や立場の強さをもたらしてくれるもの。そういうものを、私たち人間は「富」と呼んでいるんじゃないでしょうか。

人によってそれはお金かもしれませんが、いざとなったらお金に換えられる高価なもの

かもしれません。保存が効く食べ物や、どこに着て行っても恥ずかしくない服や、知識をたくさん得られる本や、便利な家電製品かもしれません。生まれながらの、あるいは努力して身につけた、特別な才能かもしれません。

何であれ、保証はあるに越したことはないですし、たくさんあればそれだけ安心できます。だから人は少しでもたくさんの「富」を、自分の手元に置いておきたいと思うのでしょう。

いざという時に足りなくならないように、その役目を十分に果たしてくれるように、私たちはなるべく「富」を貯め込もうとします。

ですが、手元に置いておけるような富は、虫に食われたり錆びついたり、泥棒に盗まれてしまうものだ、とイエス様は言われます。確かにそうです。

大事に貯め込んだその「富」が、必ずしも私たちを安心させてくれるわけじゃありません。使えばもちろん無くなりますし、使わなくてもだんだんと劣化したり、価値が下がってしまいます。

いざ使おうと思ったときには、全然役に立たなくなっているかもしれません。そして何よりも、使えなくなるかもしれないという不安が、いつも心のどこかに居座ることになるでしょう。その危険を、イエス様は指摘しておられるんです。

先々週、まさに私もこのことを思い知りました。教会の車に大事に貼っていた初心者マークが、とうとう劣化して、車からはがれ落ちてしまったんです。この初心者マークがあるから、私の運転がちょっと、いやだいぶ下手でも、周りが「しょうがないな」と許してくれる。そう思って安心していたのに、初心者マークはいつまでも私を守って

くれるわけじゃありませんでした。

ある意味、あの初心者マークは私にとって、「地上に積んだ富」だったんでしょうね。

何であれ、私たちの日々の生活を少しでも助けてくれそうなもの。私たちの不確かな未来を、少しでも保証してくれそうなもの。それが私たちにとって、大事に手元に積んでおきたい「富」なのでしょう。

ただ、それは言ってみれば、神様から私たちに与えられた恵みです。自分の力で稼いで手に入れたと思っているものだって、それは働ける体や環境が与えられているからこそでしょう。

神様が私たちを生かすために、与えてくださったもの。私たちの富、私たちに与えられた恵みを、ただ自分の手元に置きっ放しにしてはいけない。そうじゃなくて天に、神様の手の中にそれを置きなさい、とイエス様は言われます。

そう言われても、せっかく手に入れたものなんですから、自分や家族のためにしっかり保管して、いざという時のために備えておきたいのは当然です。神様からの恵みは、そもそも私たちを生かすために与えられているものですから、感謝しつつ時期を見て活用することを、イエス様は禁じてはおられません。

ここで問題になっているのは、その恵みを「積む」ことです。いざとなったら自分を助けてくれる、頼りになるとっておきのものとして、なるべくたくさん積み上げたがること。それは恵みを与える神様よりも、手元に積んだ「富」の方を信頼して、そこに自分たちの

人生を預けるのと同じことです。

あなたたちの本当の富は、恵みを与えてあなたたちを生かしておられる神様の愛、そのものだということを知らなさい。虫が食うことも、錆びつくことも、誰かに盗み出されることもない、神様からあなたたちへの愛こそが、本当に頼れるあなたたちの「富」だ。

地上に富を積むことじゃなくて、天に積まれた富に、神様の愛に心を向けなさい。そうイエス様は伝えておられるんです。

<あなたの富のあるところ>

富についての話を続ける前に、イエス様はこの「天に積まれた富に心を向ける」ということを、短いたとえ話で念押しなさいました。

体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、濁っていれば、全身が暗い。わかるようなわからないような、ちょっと唐突な感じのたとえ話ですが、これにはイスラエルの言語であるヘブライ語が関係しています。

ヘブライ語の言い回しで「目が濁っている」というのは、嫉妬とか悪意とかケチることを表現する言葉なんだそうです。つまり他の人が持っている富を自分のものと比べて、「あの人が方が恵まれている」と嫉妬すること。自分が持っている富を、他の人のために使うのを惜しむこと。そして誰かの富を、自分のものにしようと企むこと。

そういう思いは、あなたの内にある光を消して、あなたの全体を暗くしてしまう、と

イエス様は警告しておられます。

手元にある富を他の誰かと比べるんじゃなくて、ただ自分に与えられている神様の愛に、

あなたの目をまっすぐ向けていなさい。

嫉妬や欲望で濁らせないように、あなたの心を神様の愛に向けて研ぎ澄ませなさい。

そうすれば、あなたという存在全体を、神様が明るく輝かせてくださる。

そう言ってイエス様は、「富」との向き合い方を教えておられるんです。

その上で「神様に仕えるか、富に仕えるか」という二択を、イエス様は人々に迫りました。

どうやら私たちの手元にある富は、ただ持っているだけじゃ済まないようです。わかっているけど、気をつけていても、手元にある富の力は強くて魅惑的ですから、知らず知らずのうちに私たちの心をごっすり掴んでしまうでしょう。その魅力に振り回されて、いつの間にか手元の「富」を中心にした生き方になってしまう。

地上に富を積み上げようとして、他の誰かに嫉妬したり、人のために使うことを惜しんだり、他の人の富をかすめ取ろうとしてしまう。そんな風に「富」に仕える生き方は、神様の愛に従う生き方とは正反対の方向に、私たちを駆り立てます。だから「だれも、二人の主人に仕えることはできない」とイエス様はおっしゃるんです。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。神様と手元の富、どちらもを主人にして、両方を中心にして生きることはいけません。

面白いことに、先にイエス様が言われた「天に積む」富と、ここで言う「富に仕える」の富には、別の言葉が使われています。

天に積む方の「富」は、宝物とか財産を意味するギリシャ語です。そして仕える方の「富」はアラム語の「マモン」、こちらも財産とか所有物を指す言葉です。どちらも同じような意味なんですが、なぜイエス様はここであえて「富」という言葉を使い分けているのでしょうか？ちょっと不思議ですね。アラム語は、当時のユダヤ人たちの一般的な話し言葉でした。たぶん他のイエス様の言葉も、元々はアラム語で話されたものでしょう。

でも、ここでわざわざ「神に仕えるか、富に仕えるか」の富だけが、アラム語のままになっているのは、もしかしたらイエス様の話し方のせいだったのかもしれませんが。ここまでは厳かに教えておられたけど、「富」の話の締めくくりに、イエス様はちょっと砕けた言葉で話されたんじゃないかと思います。「ええか、神様とお宝様、どっちもには仕えられんよ」という感じで。

ガリラヤ湖のほとりの小高い丘の上で、この時イエス様の話を聞いていたのは、元々は漁師だった弟子たちや、貧しさの中で苦しんでいた民衆でした。その日一日を生きること必死で、聖書を研究したり、知識を身につける余裕なんかとてなかっただろう人たちに向かって、イエス様は教えを語っておられます。だから少しでも伝わりやすいように、目の前の人たちの様子に心を配りながら、イエス様は話しておられたでしょう。

神様みたいに強い力で、人間の心をはっきり捕らえて、欲望のままに振り回す。そんな「お宝様」を、あんたたちの生き方を決める主人にしたらいかん。そうじゃなくて、愛の力がはっきり捕らえてくれる神様を、あんたたちの人生を決める主人にしんさいや。そんな風に、イエス様はそこにい

る人たちにグッと近寄って、大事なことがちゃんと伝わるようになさったんでしょう。

ここにも、「富」をどこに置くかの良いお手本があるんです。厳かに教えを語ることや、「立派な先生だ」と認められて、尊敬されることよりも。神様からの良い知らせ、誰もが神様から愛されているという「富」を、目の前の人たちに手渡すことが、イエス様のいちばん大事な目的でした。

神様の思いに従って、目の前の人たちに神様の愛を手渡す。それが「天に富を置く」人の生き方です。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。そう言われたイエス様の心は、いつも天の父である神様のところにありました。

さあ、私たちの「富」はどこにあるでしょうか？私たちの富、私たちの心もまた、天にある。そう告白することができますように、今日も一緒に聖霊の助けを祈り求めましょう。

日々恵みを与えて、私たちを生かしておられる神様の愛を、何よりも頼れる「富」として歩んでいけますように。

この「富」を置きっ放しにして、しまい込むんじゃなくて、それぞれの方法で、それぞれの在り方で、目の前の誰かに手渡していけますように。神様の愛に心を研ぎ澄ませて、神様を愛し、人を愛することができますように。

祈りながら、新しい一週間を一緒に進んでまいりましょう。お祈りいたします。